

# 乳房2次検診センター

## ■検診を指導・協力した先生

### 伊藤良彌

東京都予防医学協会婦人検診部部长

### 内田 賢

東京慈恵会医科大学教授

### 落合和彦

東京産婦人科医会会長

### 角田博子

聖路加国際病院放射線科医長

### 長谷川壽彦

東京都予防医学協会検査研究センターセンター長

### 坂 佳奈子

東京都予防医学協会がん検診・診断部部长

### 福田 護

聖マリアンナ医科大学附属研究所プレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック院長

## ■検診の方法とシステム

東京都予防医学協会(以下、本会)内に設けられた「乳房2次検診センター」は、乳がん検診が視触診単独検診であった1981(昭和56)年に東京産婦人科医会(旧東京母性保護医協会、以下、医会)との協力によって設立された。1次検診(問診、視触診)を医会会員の施設で実施し、2次検診が必要とされた方について、予約制で本会の乳房2次検診センターで精密検査(問診、視触診、マンモグラフィ、乳房超音波検査、細胞診)を実施する方式で開始された。

2000(平成12)年より厚生労働省の通達にて、乳がん検診の主体が視触診単独検診からマンモグラフィ併用検診に変更され、2004年から本会の施設内あるいはマンモグラフィ搭載車でのマンモグラフィによる乳がん検診を実施するようになり、本会の乳房2次検診センターの役割も変貌を遂げつつある。

医会における1次検診は現在ほとんど行われていないが、医会施設にかりつけの方や自覚症状があり医会施設を受診された方の精密検査は引き続き行っている。

検診方式の変化とともに、乳房2次検診センターの役割は本会の1次検診(マンモグラフィもしくは職域検診や人間ドックでの乳房超音波検診)を受診された方の中で要精密検査になった方が2次検診を受ける場となってきている。また乳がん患者の増加とともに、最近では近隣の住民で自覚症状のある方、他機関での1次検診で要精密検査になった方など広く門戸を開いている。

日本乳癌学会および日本乳癌検診学会により「乳がんの精密検査実施機関の基準」が定められ、精密検査施設の精度管理も重要視される時代となり、その基準を満たす装置の設置、資格を有する技師・医師の確保を行い基準を遵守し、一般の受診者や医会などの医師に信頼される2次検診センターを目指している。

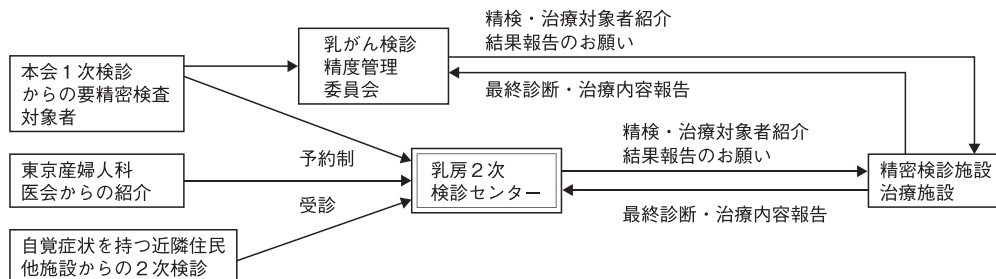
乳房2次検診センターでの精密検査の結果、さらなる精査あるいは治療が必要と判定された受診者については、2次検診の所見を記録した書類に依頼状を添えて、3次検診施設または治療機関に紹介している。

紹介先の3次検診または治療機関は、病診連携をとる都内大学病院や癌専門施設などが主ではあるが、受診者自身の住所の関係でさまざまな医療機関に紹介している。

乳房2次検診センターでは、本会内に設置された乳がん検診精度管理委員会と連携して、さらなる精密検査や治療内容についての報告をしてもらい、データを把握し、検診の精度向上に努めている。

乳房2次検診センターのシステムは下図のとおりになっている。

乳房2次検診センターのシステム



## 乳房2次検診センターの実施成績

坂 佳奈子 野 木 裕 子  
 東京都予防医学協会がん検診・診断部部长 東京慈恵会医科大学付属病院  
 竹 井 淳 子  
 聖路加国際病院乳腺外科

### はじめに

1981(昭和56)年に東京産婦人科医会(以下、医会：旧東京母性保護医協会)の2次検診施設として、東京都予防医学協会(以下、本会)内に乳房2次検診センターが開設された。

2000(平成12)年3月より厚生労働省が40歳以上の女性を対象にマンモグラフィ(以下、MMG)検診を併用することを通達し、本会においても2002年にMMGパイロットスタディ、2003年に施設内MMG検診、2004年からはMMG搭載車による車検診を開始した。現在では、乳房2次検診センターでは本会で取り扱う1次検診の2次検診(精密検査)を主として実施している。

### 受診者数と受診動機

受診者数と受診動機を表1に示す。2010年度の受診者数は1,570人であった。2007年度までは本会での1次検診の精密検診者を「検診」、医会での視触診検診の精密検診や紹介受診者を「医会」、検診に関係なく自覚症状などで受診の方を「外来」と区分していたが、医会からの紹介が減少し、他施設からの2次検診の依頼や紹介も増加したため、2008年度より医会を含め他施設からの紹介を「他施設」とし、区分は「検診」「他施設」「外来」と変更した。

内訳は検診1,149人(73.2%)、他施設250人(15.9%)、外来171人(10.9%)であった。また受診者は初診および要管理に分類しているが、再来の方でも1年以上の間隔をあけて受診した者は、別の症状や新たな検診

での要精査などで受診したものと考え、データ上は初診扱いとしている。

初診は1,084人(69.0%)、うち検診788人(72.7%)、他施設173人(16.0%)、外来123人(11.3%)であった。当施設は当初は医会の2次検診施設として開設されたが、乳がん検診の変化に伴い、最近では本会の1次検診の精密検診施設としての役割が増えていると思われる。また自覚症状などの「外来」数も増えてきており、自己触診の浸透など、女性の乳がんに対する意識の変化があると考えられた。

表1 受診者数

(1981~2010年度)

年度	受診者数		
	初 診	要管理 (再来)	計
1981~88	3,958	1,594	5,552
1989~96	3,215	2,390	5,605
1997~01	1,572	1,610	3,182
2002	662	483	1,145
2003	838	704	1,542
2004	766	904	1,670
2005	790	863	1,653
2006	639	839	1,478
( 検 診	578	626	1,204 )
( 医 会	61	213	274 )
2007	991	465	1,456
( 検 診	795	353	1,148 )
( 医 会	123	93	216 )
( 外 来	73	19	92 )
2008	1,092	475	1,567
( 検 診	771	369	1,140 )
( 他施設	193	70	263 )
( 外 来	128	36	164 )
2009	1,098	538	1,636
( 検 診	763	392	1,155 )
( 他施設	192	97	289 )
( 外 来	143	49	192 )
2010	1,084	486	1,570
( 検 診	788	361	1,149 )
( 他施設	173	77	250 )
( 外 来	123	48	171 )

初診受診者の割合は、2006年度43.0%、2007年度68.1%、2008年度69.6%と増えてきていたが、2009年度は67.1%とやや減少し、2010年度にはまた69.0%と増加している。要精密検査になった方への窓口として機能し、また管理不要で検診受診で問題ない受診者に関しては速やかに検診に戻す態勢が徐々に整いつつあったが、経過観察が必要な症例は相当数存在し、初診者の割合は60%後半である程度一定化するのかもしれない。

### 受診者の年齢構成(初診者のみ)

2010年度の受診者の年齢構成(初診者のみ対象)を表2に示す。

40-49歳が411人(37.9%)、50-59歳が285人(26.3%)と合せて64.2%となり過半数を占めた。この分布は乳がんの好発年齢と一致しており、この年齢層の受診者が増加してきていることは精密検査機関としては好ましい傾向だと思われる。

### 受診者の臨床診断(初診者のみ)

表3に受診者の臨床診断を示す。以前の分類では

「乳頭部痛」や「乳頭異常分泌」など診断名と症状名の混在があり、2008年度よりすべて診断名で統一した。したがって、以前の分類とやや異なっている。

2010年度の初診者全体のうち乳がんまたは乳がん疑いが89人(8.2%)であった。

良性疾患では乳腺症218人(20.1%)、のう胞症304人(28.0%)、線維腺腫153人(14.1%)であった。また正常(異常なし)は258人(23.8%)であった。

乳腺症という診断名が減り、異常なしが増加しているのは精密検査の精度が上がり、異常なしを正確に診断できる施設となってきたのではないかと推測する。

### 乳房2次検診センターでの管理区分

乳房2次検診センターでの受診後の管理区分を表4に示す。

568人(52.4%)は異常なしとして定期検診へ戻った。410人(37.8%)は要管理として2次検診センターでの経過観察を続けることとした。

1次検診のMMGからの局所的非対称性陰影や視触診検診での腫瘤の疑いは、乳房超音波検査(以下US)

表2 初診者の年齢構成(初診者のみ・要管理者含む)

		(1981~2010年度)												
年度	年齢	~19歳	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60~64	65~69	70歳~	計
	1981~88		65	272	420	658	811	705	543	250	108	71	36	19
1989~96		39	169	257	463	510	623	529	277	175	100	47	26	3,215
1997~01		9	29	93	236	268	254	290	181	109	55	32	16	1,572
2002		3	11	29	79	102	113	109	95	65	30	20	6	662
2003		0	13	32	90	119	162	135	122	70	46	30	19	838
2004		0	3	16	73	82	121	137	122	107	56	30	19	766
2005		2	4	22	53	71	136	128	134	124	73	30	13	790
2006		1	4	12	37	54	126	116	99	85	54	27	24	639
2006	検診	0	3	12	32	42	117	104	93	81	50	25	19	578
	医会	1	1	0	5	12	9	12	6	4	4	2	5	61
2007		0	4	9	57	93	161	181	176	137	88	50	35	991
2007	検診	0	3	4	36	67	130	152	146	114	77	36	30	795
	医会	0	0	2	9	17	19	17	19	16	9	12	3	123
	外来	0	1	3	12	9	12	12	11	7	2	2	2	73
2008		0	7	22	50	121	179	176	175	145	103	61	53	1,092
2008	検診	0	1	8	23	74	136	128	136	107	76	49	33	771
	他施設	0	1	8	9	24	27	37	28	25	15	6	13	193
	外来	0	5	6	18	23	16	11	11	13	12	6	7	128
2009		1	11	23	54	101	186	178	173	135	123	63	50	1,098
2009	検診	0	2	6	26	58	135	136	125	103	107	40	25	763
	他施設	0	4	5	10	18	34	26	34	20	9	14	18	192
	外来	1	5	12	18	25	17	16	14	12	7	9	7	143
2010		3	10	24	53	72	204	207	169	116	141	42	43	1,084
2010	検診	0	3	10	21	39	157	156	127	91	122	31	31	788
	他施設	2	3	6	14	14	26	31	31	18	12	7	8	173
	外来	1	4	8	18	19	21	20	11	7	7	4	4	123

表3 受診者の臨床診断

(2007～2010年度)

年度	診断	乳腺症	乳腺腫瘍	乳腺線維腺腫	がんおよびがん疑い	のう胞症	乳管拡張症	乳腺腫瘍	乳頭部痛	乳頭異常分泌	正常	その他	計
2007		431	3	106	96	140	4	17	0	0	163	31	991
		43.5%	0.3%	10.7%	9.7%	14.1%	0.4%	1.7%	0.0%	0.0%	16.4%	3.1%	100.0%

年度	診断	乳腺症	乳腺腫瘍	線維腺腫	がんおよびがん疑い	のう胞症	乳管拡張症	乳管内腫瘍	のう胞内腫瘍	葉状腫瘍	正常	その他	計
2008		364	25	138	93	261	8	4	6	2	281	30	1,212
		30.0%	2.1%	11.4%	7.7%	21.5%	0.7%	0.3%	0.5%	0.2%	23.2%	2.5%	100.0%
2009		541	55	271	115	360	5	7	8	0	318	33	1,713
検査 他施設 外来		453	37	192	102	219	4	5	4	0	167	18	1,201
		62	13	47	6	93	0	0	2	0	83	5	311
		26	5	32	7	48	1	2	2	0	68	10	201
(%)		31.6%	3.2%	15.8%	6.7%	21.0%	0.3%	0.4%	0.5%	0.0%	18.6%	1.9%	100.0%
2010		218	37	153	89	304	3	5	3	0	258	14	1,084
検査 他施設 外来		175	36	111	79	219	3	2	3	0	150	10	788
		31	1	30	9	52	0	1	0	0	47	2	173
		12	0	12	1	33	0	2	0	0	61	2	123
(%)		20.1%	3.4%	14.1%	8.2%	28.0%	0.3%	0.3%	0.3%	0.0%	23.8%	1.3%	100.0%

(注) 2008年度～ 病名はのべ人数となっている。複数病名のある場合もすべてカウントしている。  
 その他…脂肪腫、皮下腫瘍、リンパ節、毛嚢炎 等  
 初診者のみ

で所見がない、あるいは明らかな良性病変であると判断できれば、定期検診に戻すことを原則としているが、MMGでの微細石灰化陰影は良性の可能性がある程度高い場合でも変化を確認することが重要であり、しばらくの間、経過観察となる症例が多い。

初診者のうち要管理区分とされていたのが、2004年度42.3%、2005年度42.2%、2006年度49.5%、2007年度56.6%であり、経過観察の受診者が増え、初診に当たる精密検査の対象者が予約を取りにくい現状があり、2次検診センターの問題点の一つとなっていた。

以前は受診者の希望があれば、異常のない場合でも要管理にして定期通院の受け入れをしていたが、徐々に予約数が増加するにしたがって新たな精密検査対象者の受け入れができない状況を招きつつあった。それで、ここ数年、「異常なし」を正しく「異常なし」と診断し、不要な経過観察を減らす努力を行ってきた。また紹介元が他施設の場合は紹介元での要管理を勧め、MMGなどの必要時に2次検診センターへの受診を勧めるようにしている。このような方針の転換は、乳がんの罹患率の増加や乳がん検診の普及に伴いやむを得ないことと考える。

しかしながら、受診者が自らの地元で安価な費用

表4 受診者の判定区分

(2002～2010年度)

年度	定期検診	要管理	要精密検査	要治療		計	
				良性	がん		
2002	292	338	20	1	11	662	
2003	370	416	39	2	11	838	
2004	322	324	96	5	19	766	
2005	366	333	84	3	4	790	
2006	235	316	69	3	16	639	
2007	301	561	93	1	35	991	
2008	480	512	66	0	34	1,092	
検査 他施設 外来		307	376	58	0	30	771
		92	92	6	0	3	193
		81	44	2	0	1	128
(%)		44.0%	46.9%	6.0%	0.0%	3.1%	100.0%
2009	498	483	62	2	53	1,098	
検査 他施設 外来		309	355	54	0	45	763
		100	84	3	1	4	192
		89	44	5	1	4	143
(%)		45.4%	44.0%	5.6%	0.2%	4.8%	100.0%
2010	568	410	75	0	31	1,084	
検査 他施設 外来		364	331	66	0	27	788
		105	59	6	0	3	173
		99	20	3	0	1	123
(%)		52.4%	37.8%	6.9%	0.0%	2.9%	100.0%

(注) 初診者のみ

で検診を受けられるように誘導することは受診者のさまざまな負担を軽減する上、さらには新たな要精密検査の対象者を受け入れる余地を作ることと可能とする良い面も多く、精密検査施設の2次精検センターとして望ましい形になりつつあると考えている。

その効果が徐々に現れ、2008年度では要管理は46.9%、2009年度では44.0% 2010年度は37.8%と減少

表5 治療機関から報告された診断名  
(3次精密検査結果・再来含む)

(2002～2010年度)

	乳がん	乳腺線維腺腫	乳腺症	のう胞症	その他	無回答	計
2002	23	7	4	0	3	7	44
2003	30	9	7	1	17	10	74
2004	45	33	54	11	40	27	210
2005	33	18	17	7	9	35	119
2006	51	14	19	6	11	10	111
2007	61	18	21	3	16	26	145
2008	70	7	21	2	8	11	119
検診	64	7	18	2	6	7	104
他施設	5	0	2	0	1	3	11
外来	1	0	1	0	1	1	4
(%)	58.8%	5.9%	17.6%	1.7%	6.7%	9.2%	100.0%
2009	81	6	21	3	17	8	136
検診	70	4	17	3	12	6	112
他施設	4	2	3	0	2	0	11
外来	7	0	1	0	3	2	13
(%)	59.6%	4.4%	15.4%	2.2%	12.5%	5.9%	100.0%
2010	77	14	21	1	18	3	134
検診	68	11	20	1	16	2	118
他施設	6	3	1	0	1	0	11
外来	3	0	0	0	1	1	5
(%)	57.5%	10.5%	15.7%	0.7%	13.4%	2.2%	100.0%

(注) 2008年度精検者数は118人だが、1人は左右重複で乳がんであるため、計は119人となっている。  
2009年度精検者数は131人だが、5人は左右重複で疾患があるため、計は136人となっている(そのうち左右重複で乳がんは4人)。  
2010年度精検者数は129人だが、5人は左右重複で疾患があるため、計は134人となっている(そのうち左右重複で乳がんは4人)。

(2010年度)

	非浸潤性 乳管癌	非浸潤性 小葉癌	乳頭腺管癌	充実腺管癌	硬 癌	小葉癌	粘液癌	アポクリン癌	不明 その他	計
検診	14	0	12	6	31	2	1	0	2	68
他施設	1	0	2	0	3	0	0	0	0	6
外来	0	0	0	0	3	0	0	0	0	3
計	15	0	14	6	37	2	1	0	2	77
(%)	19.5%	0.0%	18.2%	7.8%	48.0%	2.6%	1.3%	0.0%	2.6%	100.0%

(2010年度)

Stage	非浸潤性 乳管癌	非浸潤性 小葉癌	乳頭腺管癌	充実腺管癌	硬 癌	小葉癌	粘液癌	アポクリン癌	不明 その他	計	(%)
0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	15	19.5%
I	0	0	10	5	23	0	0	0	0	38	49.3%
IIA	0	0	2	0	8	2	1	0	0	13	16.9%
IIB	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1.3%
III	0	0	1	0	3	0	0	0	0	4	5.2%
IV	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
不明	0	0	1	1	2	0	0	0	2	6	7.8%
計	15	0	14	6	37	2	1	0	2	77	100.0%

(注) 組織型不明・ステージ不明の方は、追加手術予定や術前化学療法中などで未回答のものが含まれる。

してきている。

初診者のうち要精密検査は75人(6.9%)、がんなどで要治療は31人(2.9%)、となっている。以前は良性疾患で手術などの治療することもあったが、最近では良性疾患については経過観察や検診受診でよいとの方針が一般的となっている。2009年度は良性症例の要治療が2例認められたが、2010年度は0例であった。

### 治療機関から報告された診断名

治療機関から報告された診断名を表5に示す。2010年度は129人(134病変)を3次精密医療機関へ紹介し、最終結果が把握できたものは131病変(回答率97.8%)であり、2007年度82.1%、2008年度90.8%、2009年度94.1%と徐々に回答率は上がってきている。これは追跡調査を定期的に行うシステム作りや看護師などのスタッフの努力の賜物であると考えた。また連携している精査・治療病院の先生方のご協力にも感謝申

し上げたい。乳がんは77人(陽性反応適中度57.5%)であった。陽性反応適中度は2004年度21.4, 2005年度27.7, 2006年度45.9, 2007年度42.1, 2008年度58.8, 2009年度59.6%, 2010年度57.5%と今回若干低下したが、ここ数年の傾向として向上している。これは回答率が上昇し、精検結果の把握率が高くなっていることおよび精度の高い2次検診を目指して努力している結果であると思われる。

病期(ステージ)分類では、ステージ0の非浸潤性乳管癌が15例(19.5%)であり、ステージIが38例(49.4%)で、両者を合わせた早期癌の割合は53例(68.8%)であった。ステージⅢは4例、Ⅳは0例で、比較的進行度の早い段階の乳がんの発見の割合が2009年度に引き続き多くなっている。今回、病期不明は6例あった。これは昨今、術前化学療法などの

手術前の治療が一般的となり、その治療終了が6ヵ月以上にわたることもあり、その影響で回答が集計に

表6 乳がん検診受診者数と発見率

(2002~2010年度)			
年度	受診者数	乳がん	発見率
2002	1,145	23	2.0%
2003	1,542	30	1.9%
2004	1,670	45	2.7%
2005	1,653	33	2.0%
2006	1,478	51	3.5%
2007	1,456	61	4.2%
2008	1,568	70	4.5%
検診	1,140	64	5.6%
他施設	264	5	1.9%
外来	164	1	0.6%
2009	1,636	81	5.0%
検診	1,155	69	6.0%
他施設	289	4	1.4%
外来	192	8	4.2%
2010	1,570	77	4.9%
検診	1,149	68	5.9%
他施設	250	6	2.4%
外来	171	3	1.8%

表7 乳がん発見患者が受けた治療

(2003~2010年度)						
年度	全乳房切除術	乳房部分切除術	その他	不明	計	
2003	1	22		8	31	
2004	9	26		8	43	
2005	4	22		7	33	
2006	11	34	5	5	55	
2007	9	49	1	2	61	

年度	全乳房切除術	乳房部分切除術	術前療法中	手術適応外	不明	計
2008	21	48	0	1	0	70
(%)	30%	69%	0%	1%	0%	100%
2009	15	64	2	0	0	81
(%)	19%	79%	2%	0%	0%	100%
2010	24	47	3	0	3	77
(%)	31%	61%	4%	0%	4%	100%

(2006~2010年度)													
年度	全乳房切除術			乳房部分切除術							その他	不明	計
	Bt	Bt+Ax	Bt+SNB	Bp	Bp+Ax	Bp+SNB	Bq	Bq+Ax	Bq+SNB	Tm+SNB			
2006	1	7	3	6	7	21	0	0	0	0	5	5	55
2007	2	5	2	2	8	31	0	1	6	1	1	2	61

年度	全乳房切除術			乳房部分切除術							術前療法中	手術適応外	不明	計
	Bt	Bt+Ax	Bt+SNB	Bp	Bp+Ax	Bp+SNB	Bq	Bq+Ax	Bq+SNB	Tm+SNB				
2008	3	10	8	5	7	30	1	1	3	1	0	1	0	70
検診	2	10	6	4	7	28	1	1	3	1	0	1	0	64
他施設	1	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	5
外来	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
2009	2	6	7	3	3	42	1	5	10	0	2	0	0	81
検診	2	5	5	1	3	38	0	5	9	0	1	0	0	69
他施設	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
外来	0	1	0	2	0	3	1	0	1	0	1	0	0	9
2010	0	7	17	0	3	35	0	1	8	0	3	0	3	77
検診	0	6	14	0	3	33	0	1	6	0	3	0	2	68
他施設	0	1	3	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3
外来	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	1	3

(注) Bt: 全乳房切除術 Bp: 乳房円状部分切除術 Bg: 乳房扇状部分切除術 Ax: 腋窩リンパ節郭清 SNB: センチネルリンパ節生検 Tm: 腫瘍摘出術

間に合わないことが考えられた。

## 乳がん発見率

乳がん発見率を表6に示す。2010年度受診者数1,570人のうち乳癌は77人(4.9%)であった。がん発見率は表に示すとおり年々増加しているが、2010年度はやや減少した。がん発見率は5%前後で今後も推移するのかもしれない。検診からの発見が最も多いが、他施設よりの紹介例や自覚症状などで来院する外来からの発見も少ないがあり、乳房2次精検センターの役割が多岐にわたってきたことを示している。検診例だけでみると乳がん発見率は5.9%となり、過去最高であった2009年度の6.0%に次ぐ数値となっている。1997年度以降発見率は2%台であったが、2006年度に3.5%となり、2008年度、2009年度はさらに高くなってきている。特に郊外を中心とした地域などでは、自覚症状のある方が病院へ行かずに検診を受けているケースもあり、それもがん発見率が高い理由の一つと考えられる。今後、繰り返し受診者が増えるにつれて、がん発見率はやや低下するのではないかと考える。

## 施行された治療法

発見された乳がん77例の術式を表7に示す。治療施設から術式の報告は77例中74例で得られた。

近年ではセンチネルリンパ節生検(以下、SNB)を施行するところが増えたことに伴い、2006年度より内訳を提示した。SNBとは、センチネルリンパ節(見張り役リンパ節)を病理組織的に検索し、癌細胞の転移がなければ腋窩リンパ節郭清(以下、Ax)を省略する手法である。この方法は乳がん患者の術後の腕のむくみや運動障害の発生を減少させており、乳がん患者のQOL向上に非常に貢献している。2次検診センターで発見される乳がんはステージ0、Iが多く、腋窩リンパ節転移を認めないことが多い。このような患者は縮小手術による恩恵が非常に大きいと思われる。

全乳房切除24人(31.2%)のうちSNB17人(70.8%)、

Ax7人(29.2%)であった。乳房部分切除(温存手術)は47人(61.0%)のうちSNB43人(91.5%)、Ax4人(8.5%)であった。2009年度に比較してもさらにSNBの比率が増加してきている。乳房部分切除の割合が今回は61%となり、2009年度よりやや減少し、全国平均とほぼ同様の結果であった。全乳房切除の割合は減少している。乳房部分切除術およびSNBは検診による早期発見の恩恵であると考えられる。縮小手術の傾向がさらに強まっていると考えられた。

非触知腫瘍で自覚症状がないものの、MMGによって広範囲に微細石灰化を認める非浸潤性乳管癌の場合、非常に早期であるにもかかわらず全乳房を切除しなくてはならないことが多く、患者の失望度が高い。患者の失望度や喪失感を軽減するため、最近では手術時の同時乳房再建やインプラント(人工乳房による再検)などの説明なども行われており、乳房2次検診センターでも、そのような説明なども行うようにしている。

また、近年腫瘍の大きな症例で全摘が必要な例に対して、術前に化学療法(抗がん剤治療)を施行し、腫瘍を十分に小さくしてから部分切除(温存手術)を行うことも可能となり、比較的大きな腫瘍に対しても乳房温存の可能性が出てきたことは患者には明るい材料となっている。

## 結語

乳房2次検診センターの年間実施成績の報告をした。2次検診センターの役割は要精密検査と指示された受診者に対して、的確な精密検査を実施すること、また精査の結果、治療が必要と思われた受診者を速やかに専門病院へ紹介することとともに、経過観察の必要な受診者を定期的に診察することと考えている。加えて、「異常なし」あるいは「良性」であると判断し、外来管理の必要のない受診者を速やかに検診に戻すことも重要な役割であると認識している。そのことが受診者の保険診療にかかる金銭的負担や通院にかかる時間的負担を減少させ、また精密検査が本当に必要な受診者が速やかに受診できる道筋とな

ると考えている。

乳がんでない場合、良性乳房疾患の経過観察をする施設が都内で非常に少ない上、都内の乳腺専門外来は乳がん患者で混雑する状態が日常化し、がん患者の定期通院と良性乳房疾患患者の定期通院の施設を分離していきたいという流れもある。そのような東京都の現状からかんがみても2次検診センターの存在意義は非常に大きいと思われる。

また、3次精密検査機関や治療機関へ紹介する場

合、事前に2次検診センターにおいて、受診者に検査、治療の流れや治療法の内容などを説明することで、受診者の精神的な負担も緩和されていると思われる。最近では治療機関受診後に今後の治療法をめぐって家族を伴ってセカンドオピニオンを求めて来るケースもみられ、検診と治療の間において、受診者が気軽に相談できる窓口としての2次検診センターの役割は今後も増える可能性があると思われる。